

博士学位論文概要

**The Aesthetics of Personality beyond Traditionalism and
Modernism: A Study of E. M. Forster**

(伝統主義とモダニズムを越えたパーソナリティーの美学

—E・M・フォースターに関する—考察)

岩崎 雅之

E・M・フォースター (E. M. Forster, 1879-1970) は、彼独自のとらえどころのないナラティブのために、伝統的な系譜に属する作家であるともモダニストであるとも評されてきた作家である。イギリス文学史では、ジェーン・オースティン (Jane Austen) やジョージ・メレディス (George Meredith)、アーノルド・ベネット (Arnold Bennett)、ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) などと比較されることが多く、ここに挙げた作家の傾向からも彼の小説家としての特異性を窺い知ることができる¹。ではフォースターはモダニズムの技法を退けた伝統的な作家だったのだろうか。それとも伝統を捨て去り、新たな手法を求めたモダニストだったのだろうか。はたまた彼の作品は伝統とモダニズムという二つの概念だけでは理解することができない、独自の特徴を備えたものなのだろうか。フォースターの作品の主題は、理想的な個人的人間関係の構築である。それが教養小説や、そこから発展した彼独自の自己と国家の寓意物語の様式に則って描かれる。作中人物は時に異性愛者、時に同性愛者である。彼らは「象徴的瞬間」と呼ばれる啓示的瞬間を経験し、内面に大きな変化を引き起こす。この経験が個人的人間関係の構築の第一歩となる。本論文は、この「パーソナリティの美学」とも言うべき彼のナラティブの特徴を、古典的およびモダニズムの教養小説や、モダニズム期における実験的手法と比較することで明らかにするものである。この考察を通じ、フォースターの小説家としての立場を提示する。

まず序論では、フォースターの作品に関する批評の歴史を概論で紹介する。フォースターの初期の作品は教養小説の様式を採り、若者の人格の陶冶や挫折を描いている。フランコ・モレッティ (Franco Moretti) によれば、教養小説は主人公の内的衝動と社会という外的世界の要求の調和を目指す表現形式である。この小説の様式は、近代性に対する反応として生まれたもので、18、9世紀の急激に変化する社会の本質が、主人公の若さや未熟さとなって現れたものであると言う²。ジェド・エステイ (Jed Esty) は、この小説群がドイツにおけるゲーテ、シラー、レッシング、ヘルダーによって提唱された美学の発展から生まれたものであり、古典的な教養小説では主人公の成長と国家の発展が同一視さ

¹ Lionel Trilling. *E. M. Forster*. (London: Hogarth, 1967) 9-23; Judith Herz. *A Passage to India: Nation and Narration*. (New York: Twaine, 1993) 4; Dominic Head, *Modernist Short Stories*. "Forster and the Short Story." *The Cambridge Companion to E. M. Forster*. Ed. David Bradshaw. (Cambridge: Cambridge UP, 2007) 77-91.

² Franco Moretti. *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture*. (London: Verso, 1987) 3-6.

れていたと言う³。しかし、モダニズムの時代に突入すると、若者の成長即国家の発展という前提が崩壊する。モダニズム期の教養小説では、若者と帝国の間を乗り越えられない断絶が存在していることが明らかにされ、主人公が意識的に成長しない様子が描かれる。例えばジェイムズ・ジョイス (James Joyce) のスティーヴン・ディーダラスやウルフの『船出』(*The Voyage Out*, 1915) におけるレイチェル・ヴィンレイス (Rachel Vinrace) は、植民地の現実を目の当たりにし、成熟への道を諦める。

モレットティとエステイの議論は 18 世紀から 20 世紀初頭にかけての教養小説の特質を論じる上で非常に有益であるが、本論文で注目したいのは、フォースターが教養小説で描いたクリアな主体の自己形成であり、またこの様式から発展した『ハワーズ・エンド』(*Howards End*, 1910) と『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924) における自己と国家の共存もしくは離反という物語のあり方である。19 世紀の教養小説では多くの場合主人公が異性愛者であるため、異性愛の言説の再生産と強化という役割を担っていたと言える。だがフォースターは、クリアな若者が成熟への道を辿っていく様子を描き、「正統な」教養小説の基準には沿わない類の内的衝動と外的要求の調和を主題とした小説を生み出した。『天使も踏むを恐れるところ』(*Where Angels Fear to Tread*, 1905) のフィリップ・ヘリトン (Philip Herriton) は遍歴の過程で、イタリア人のジーノ (Gino) に対し同性愛的な欲望を、キャロライン・アボットに対して異性愛的な欲望を抱く。『果てしなき旅』(*The Longest Journey*, 1907) の主人公のリッキー・エリオット (Rickie Elliot) は、結婚後妻アグネス (Agnes) の元を離れ、異父弟のスティーヴン・ウォナム (Stephen Wonham) を魂の伴侶として選ぶ。『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*, 1908) の主人公ルーシー・ハニーチャーチ (Lucy Honeychurch) とジョージ・エマソン (George Emerson) は、ロマンチックな恋愛を経験し、成熟への道を辿るが、その過程でジョージはフレディー (Freddy) やビーブ牧師 (Mr Beebe) との交流を通じ、同性愛者としての主体形成を行う。『モーリス』(*Maurice*, 1971) は、異性愛を「正常な」ものとする社会において、同性愛者の主人公がいかに苦悩し、成長していくかを描く。『インドへの道』は教養小説とは言えないが、シシル・フィールドイング (Cyril Fielding) とアジズ (Aziz) の同性愛的な関係の発展に結び付くように、インド

³ Jed Esty. *Unseasonable Youth: Modernism, Colonialism, and the Fiction of Development*. (Oxford: Oxford UP, 2012) 5.

におけるアデラ・クウェステッド (Adela Quested) の遍歴が描かれる。これらの作品の変遷からわかるように、フォースターが描き続けていたのは、挫折や成長という古典的な教養小説の様式を越えた、パーソナリティーという絶対的なものである。このことを本論文では「パーソナリティーの美学」と呼ぶ。『ハワーズ・エンド』においても、フォースターは教養小説とは異なる種類の個人の成長と国家との一体化を描く。マーガレット・シュレーゲル (Margaret Schlegel) は金や愛の試練を乗り越え、精神主義的なシュレーゲル家の価値観と、ウィルコックス家の唯物主義の融和を目指す。この作品では、古典的な教養小説における若さの代わりに、統一的な価値観や感覚を失っていくイギリスに対するマーガレットの不安が同様の役割を果たしている。

以上のようなフォースターの「パーソナリティーの美学」の変遷を探るために、本論文の本論は4つの章から構成されている。第1章「個性の発展と退行」(“Development and Decline of Personality”) では、フォースターの短編小説を扱い、彼の「パーソナリティーの美学」の発生段階を探る。第2章「異性愛・同性愛のナラティブ」(“Narratives of Hetero- and Homosexual Love”) では、主人公が複雑なセクシュアリティを有している初期短編小説を扱い、若者の成長と挫折が教養小説の様式に沿ってどのように描かれているかを論じる。第3章「単声的／多声的ナラティブ」(“Monologic and/or Polyphonic Narratives”) では、フォースターの単声的なナラティブとウルフの多声的なナラティブの比較を行い、自己と国家の物語の様式を探る。第4章「個人的、没個人的そして奪われた声」(“Personal, Impersonal and Appropriated Voices”) では、教養小説の形式の破綻と破滅的な象徴的瞬間を分析する。またこの章では、ポストモダンの時代において映画化されたフォースターのナラティブの特徴を明らかにする。

まず第1章では、フォースターの啓示的瞬間の原型がどのように現れているのかを「コロノスからの道」(“The Road from Colonus”) と「永遠の瞬間」(“The Eternal Moment”) において考察する。この作品は、ケンブリッジ大学出身者で構成された「使徒会」(Apostles) による、『インディペンデント・レビュー』(Independent Review) という雑誌に掲載された。フォースターが描く啓示的瞬間は、この雑誌が生み出す自由主義の言説と不可分のもので、個人主義を称揚するものであった。保守党やそれと結託していたキリスト教に対して反対の意を示すように、「コロノスからの道」ではルーカス氏 (Mr Lucas) がギリシャに

あったプラタナスの樹から神秘的な体験を授かり、「永遠の瞬間」ではミス・レイビー (Miss Raby) の過去と現在が会う啓示的瞬間が描かれる。先行研究では書誌学的なアプローチがなされてこなかったが、フォースターの初期短編小説とこの雑誌の関係を探ることで、後年『ハワーズ・エンド』と『インドへの道』へと発展していった彼のナラティブの初期段階が明らかになる。

フォースターの「パーソナリティーの美学」は、「機械が止まる」(“The Machine Stops”) や「リトル・インバー」(“Little Imber”) では、機械と戦争によって人間性を失っていく社会に対する批判として現れる。「機械が止まる」では、科学が高度に発達した社会において、肉体的欲望が卑しいものとされ、人々がますます非人間的になっていく様子が主人公クーノー (Kuno) と母親のヴァシュティ (Vashti) の関係を通して描かれる。「リトル・インバー」は同様の主題を受け継ぎ、テクノロジーとセクシュアリティの問題に踏み込んでいる。ウォラム (Warham) という年老いた男性とインバー (Imber) という青年が、戦争で荒廃し男性の数が激減した世界において、どのように同性愛を育むかが描かれる。

第2章「異性愛・同性愛のナラティブ」では、初期長編小説における象徴的瞬間が、いかに異性愛・同性愛の発展に関わっているかを論じる。『天使も踏むを恐れるところ』『果てしなき旅』『眺めのいい部屋』は若者の成長と挫折を描いた作品であり、主人公が金や愛の試練にどのように立ち向かっていくかを描く。これらの作品では結婚が重要な役割を果たすが、同時に同性愛への目覚めや同性とのクリアな交わりも主人公の人格の発展に大きな意味を持つ出来事として提示される。『天使も踏むを恐れるところ』では、主人公のフィリップがジーノとは同性愛的な、そしてキャロライン・アボットとは異性愛的な関係を構築するが、最終的に三角関係に陥り、愛の試練を前に挫折する。彼の成長と挫折は、従来型の教養小説は異なるクリアな側面を持っており、この点にフォースターのナラティブの独自性が見られる。『果てしなき旅』も教養小説でありながら、そこから逸脱する主人公の成長のあり方に特徴がある。主人公のリッキーは、パブリック・スクールの教員でありながら、帝国主義者を養成する大英帝国の教育体制に反旗を翻す。妻のアグネスは同性愛者としてのリッキーの自己発見を妨げるが、リッキーはその制止を振り切り、異父弟のステューヴンを人生の伴侶に選ぶ。帝国の認識からすれば退行的で不毛でさえあるリッキーの同性愛への目醒めを、フォースターは真の自己形成として描く。『眺めのいい部屋』は、ルーシーとジョージが繰り返し肉体的接触を行い、ヴィクトリア朝的

な因習から解放され真実の愛に目醒める物語である。だが、肉体の愛への目醒めは、単に異性愛的行為によってのみ達成されるものではない。「聖なる湖」での水浴の場面に見られるように、ジョージは美しい自然の中でフレディーとビーブ牧師と戯れ、同性愛的関係を発展させる。ジョージは異性愛・同性愛双方に触れ、成熟した一人の男性へと成長していく。しかし、第二次世界大戦後、フォースターは「部屋のない眺め」(“A View without a Room”)というエピソードを書き、ジョージとルーシーが幸せに結ばれる結末を否定する。大戦によりジョージとルーシーは住む家を失い、世界を憎む。彼らは一切の戦争を終わらせるような、更なる戦争を望む。このエピソードでは、戦前には可能であった若者とイギリスの理想的な同一化が、戦後社会において不可能なものになったことが明らかになる。

第3章では、まずフォースターの『ハワーズ・エンド』とウルフの『灯台へ』のナラティブの比較を行う。『ハワーズ・エンド』では一人称で語る個性的な語り手が登場し、「誰がイギリスを継承するのか」という問題を読者に提起する。この語り手に導かれ、読者は象徴的瞬間を経験して成長するマーガレットの姿を見る。ウルフは、道徳家であるかと思えば喜劇役者のような口ぶりになったり、リアリズムの手法と象徴主義的な手法を一貫性なく用いるフォースターのナラティブを「ダブル・ヴィジョン」と呼び、欠点としている。確かにフォースターのナラティブにはこのような欠点が存在しているが、ミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin) の言葉を借りれば「単声的」と呼ぶことができる特徴を備えており、登場人物と語り手の声が力強く一つにまとまる効果を生み出している。一方、『灯台へ』におけるナラティブは、没個性的な語り手が登場し、ラムジー夫人 (Mrs Ramsay) やリリー・ブリスコウ (Lily Briscoe) などそれぞれの登場人物の声が「多声的」に響き合う物語となっている。『ハワーズ・エンド』でも『灯台へ』でも、主要登場人物が啓示的瞬間を経験し、物語に大きな動力を与えるが、ウルフのナラティブと対位的に比較することで、『ハワーズ・エンド』が一人称の語りを効果的に使い、教養小説の様式を独自の自己と国家の物語に発展させていることが明らかになる。

また、『モーリス』はフォースターの自伝的要素を多分に含んだ、同性愛者を主人公とした教養小説である。主人公モーリス (Maurice Hall) の成長の過程は、帝国の掲げる異性愛の言説との格闘である。物語の最後で、モーリスは友人クライヴ・ダーラム (Clive Durham) の屋敷に勤めている森番アレック・スカダ

ー (Alec Scudder) と結ばれる。しかし、1960年にフォースターは「あとがき」を付け、そのような結末が大戦後の社会では現実的なものではなくなってしまうと述べる。社会的「異常者」を匿うイギリスの緑林は姿を消し、科学技術を用いた管理型社会が発展した。「あとがき」からは、同性愛者の教養小説の可能性と限界が見えてくる。

第4章では、帝国と自己という観点から、『インドへの道』において破滅的瞬間として描かれるマラバー洞窟の象徴的瞬間に注目する。アデラは「本物の」インドを見にやって来るイギリス人女性である。しかし、彼女の内的発展は植民地における現実によって阻まれる。アジズらとマラバー洞窟へと足を伸ばし、象徴的瞬間を経験するが、この啓示的瞬間が彼女の成長に結び付くことはない。裁判所で、彼女は再び洞窟での出来事を思い出し、無意識のうちに遠ざけていたロニーとの結婚に対する恐怖心に気付く。この啓示的瞬間の作用の仕方は「永遠の瞬間」におけるミス・レイビーのそれと同質である。さらに、『インドへの道』におけるナラティヴの特徴は、同じく女性の成長と挫折を描いた『ダロウエイ夫人』と比較するとより明確になる。この小説でも狂気、老い、死といった主題が登場人物の啓示的瞬間を通して提示される。「ハイ・モダニズム」に登場した実験的手法と比較することで、フォースターの象徴的瞬間の独自性が明らかになる。

同様に、本章ではフォースターの作品が1980年以降どのように映画化されたかを考察する。フォースターの小説はいわゆる「ヘリテージ映画」と呼ばれる映画に翻案され、サッチャー政権下のイギリスで揺らいでいたナショナル・アイデンティティーを再構築し、「イングリッシュネス」を強化するために利用された。本節では原作と映画のナラティヴの比較を行い、ポストモダンの時代において国家的な枠組みを再構築するために、フォースターの作品がどのように加工され、受容されたかを論じる。この比較を通じて、フォースターの小説のナラティヴの独自性を明らかにする。

「パーソナリティーの美学」の変遷を辿り、本論文はフォースターが伝統的手法をモダニズムの方向に、モダニズム的手法を伝統的な方向に発展させた作家であると結論付けた。『ハワーズ・エンド』や『インドへの道』に登場する一人称の語り手は、『トム・ジョーンズ』(*Tom Jones*, 1749) や『虚栄の市』(*Vanity Fair*, 1848) の語り手と近い特徴を持っているが、小説の枠組みを壊す過激さも備えており、その意味ではデイヴィッド・ロッジも指摘している通り、ポスト

モダン的でさえある⁴。しかし、フォースターは意識の流れのような実験的手法は用いず、あくまで伝統的な写実主義に則って小説を書いた。フォースターが最終的に辿り着いた境地は、言葉それ自体が無意味になり、個人の成長が望めなくなるような歴史的地点であった。『インドへの道』では、どのような言葉も「アウ・バウム」というこだまに変わり、異性愛・同性愛による理想的な個人的人間関係の構築は等しく不可能なものとして提示している。こだまが生み出す不条理は『ゴドーを待ちながら』(*Waiting for Godot*, 1952)におけるそれと類似しており、いかなる風刺も無化する。この意味において、フォースターの姿勢はウルフのモダニズムよりも徹底したものであったと言える。それではフォースターの最後の長編小説となった『インドへの道』で語られる、「まだだめだ…そこではだめだ」という言葉からは愛や友愛に対する幻滅、もしくはヒューマニズムに対するあくなき挑戦という姿勢が読み取れるが、フォースターが描き続けていたのは、映画のナラティブでは大部分削り落とされてしまった皮肉や風刺が健全に機能する、国家と個人の理想的な調和である。彼にとってそのようなイギリスはこれからやって来るものである。彼の「パーソナリティーの美学」は、そのために存在していたのである。

⁴ David Lodge, *The Art of Fiction*. (London: Penguin, 1992) 9-12.